

年頭所感

譜久山病院 理事長 譜久山 當 悦



新年おめでとございます。私は、今年六回目の子年を迎えます。丁度十二年前の平成八年年頭にも寄稿させて頂き、左上腕動脈塞栓症の手術を受けたことを書き健康に気をつけ、内外の学会に参加したいとの還暦の抱負を書かせて頂きました。その後診療の合間にアメリカやヨーロッパ、中国の学会にも積極的に参加していましたが、国内の浜松の学会の後、平成九年十一月二十日早朝五時、いつもの様に自宅から三百m程の小生の病院へ出勤すべく着替えていた時、頭の中でドーンという音がし、体が床に叩きつけられました。薄れ行く意識の中で、「これが脳内出血か」と実感しました。慌ただしく当院看護師に点滴の指示をしながら、当時西神戸医療センター副院長である知己の脳外科の藤田勝三先生に連絡している間に意識を消失

しました。譜久山病院で一日入院し、翌日西神戸医療センターに転院し、一時は死線を彷徨いましたが藤田先生の懇切な治療のおかげで九死に一生を得ることができました。しかし左側被殻の出血のため右片麻痺、失語症、発語障害、構語障害が残りました。

その後リハビリテーション病院でリハビリを行い、毎週週末には当時バプテスト病院院長の白方誠彌先生が遠路京都から診察にきてくれました。小生を助けて下さった皆様のお陰で発病後十年を無事に経過することができました。現在は車椅子生活ではありますが、毎日病院に出勤し、リハビリ室や病室を回診しております。この病気になって初めて患者様の気持ちが変わるようになりました。それは病気ゆえ感情コントロールが難しく、医療関係者の何気ない言葉に傷ついてしまうことです。患者様の心への思いやりが大切と改めて感じました。小生は今ワイフアリン治療中ですが、INRの治療域が狭く、注意が必要となっています。PT-INRのコントロールはなかなか難しく、服用中에서도出血や梗塞を発症することがあります。これらを自覚し今後ともリハビリを続け、これ以上悪化しないように気をつけていきます。学会や医師会の会合にも参加できるよう頑張っていき

ますので、今後とも宜しくお願い致します。厳しい時代ですが、諸先生皆様の医業が益々発展されます事をお祈り致します。

《明石市》

